

餅粥

〔侍中群要六〕餅饘事

家列見定考後朝、自官厨家獻餅饘入折櫃居是殿上料也、依爲後懸歟、專非供御料、而不知案内之藏人

獻大盤所、或奏事由云々、而今多宛供御、此事如何可隨末代之例歟、

赤小豆粥

〔名物六帖飲食殺核〕赤小豆粥草本

〔倭訓栞中編一〕あかきをもの。四季物語に、あづきの御粥成べしといへり、古歌に、

春くればあかきをもの、あへものも恵にもれぬ御代にあふらし

〔物類稱呼四食〕小豆粥 あづきがゆ 加賀にて、さくらがゆと云、但馬國にて、さふすいといふ、世

俗わたましに赤豆粥を煮て祝ふこと有、一説に是はもと伊豆の國風にて、三島明神の氏子伊豆

の豆と三島の三を象りて、豆三粒入るより、今通じて世上の流例となるといへり、未詳 又正月十

五日小豆がゆを煮て都鄙家毎に是を食す、清少納言枕草子二十五日はもちがゆのせくまいると

かきしも此こと也、をなじ草子に、かゆの木にて女をうつ事を書くも此日なり、狹衣にも見えた

り、

〔延喜式主水〕正月十五日雜給粥料内侍内教坊女等料、并

米一石、小豆五斗、鹽八升、柏廿把、薪三百六十斤、

〔公事根源正月〕獻御粥

十五日

けふ亥の時あづきの粥をにて、庭中に案を立て、天狗を祭て其後東に向ひ、再拜してひざまづき

て是を食すれば、年中の邪氣をのぞくといふ本説有、

〔後水尾院當時年中行事正月〕十五日、あしたの物、あかの粥を供す、御かゆの御さかづき參ル、女中

も御前にてたぶ、七日の御ぞうニ同じ、

〔倭訓栞中編十三〕だいしこう 十一月廿三日を大師講といひ、赤小豆粥を調食ふ、天台大師の忌